WTOC2007
、In Kiev

大久保 見事世界第６位

2007年8月 世界トレイルＯ選手権 大会 (ウクライナ、キエフ)

チーム・
マネジャー
こやま たろう

世界選手権６位の大久保（右）。強豪を破って堂々の入賞だ。

1999 年のトレイル O ワールド・カップ開催から７年、「あの」ウクライナが、WTOC のホスト国として 64 人の世界のトレイルOのエリートたちを迎えた。
「いろいろあり」の大会であったが以下はその速報。

■ 猛暑の国、ウクライナ

ここ東欧ウクライナも世界の例外ではなく、連日35度を越す異常気象の“猛暑”の首都キエフで、フットオリエンテーリング世界選手権大会と共に開催された第４回世界トレイル０選手権大会は、予想外ともいえる 17 か国 64 人という大勢の各国精鋭の参加でおおいに盛り上がった。しかし、ともかく暑かった！

■ イベント・センターは市内からチェルノブイリ方向へ40キロ自然の中 ・陸の孤島

当初はキエフ市中心のホテルがイベント・センターに予定されていたが、車椅子に適したバリア・フリーの設備が整っておらず、IOF イベント・アドバイザーの“アドバイス”で、急遽ウクライナ国立リハビリテーション・センターなる場所に変更になった。

キエフ市内からチェルノブイリ方向(北)へ約 40 キロの郊外に、広大で深い深い松林に囲まれた幾棟もの宿泊設備があり、なるほどバリアフリーの配慮がされており快適ではあるのだが、最寄の町 Lyutezh まで４キロ歩かなければキエフ行きのバスに乗れないという身動きの取れない環境。売店の類はもちろん無く、決まったメニューの食事を食べ、毎朝毎夕１時間あまりバスに揺られて競技会場を往復するいささか制限された生活パターンではあった。某いわく「これは収容所だ！」…当たらずといえども遠からじ。

■世界に挑むわがメンバーは

８月 20 日深夜に近い頃に日本チームの最終メンバーが到着し総勢 11 人がそろった。

Ｐ(パラリンピック・クラス)選手
　水野　義幸
　蓮本　勇喜
　木島　英登
オープン・クラス(総合クラス)選手
　大久保　裕介
　木村　治雄
　田中　徹
以上のほか　オフィシャルとして
　高橋　厚（チーム・リーダー）
　鈴木　規弘(コーチ)
　稲田　俊彦(エスコート)
　水野　尚子(エスコート)
　小山　太朗(チーム・マネジャー)

■ やる気まんまんの各選手

さて、前日のモデル・イベント１に続く８月 22 日はいよいよ本競技第１日目。キエフ市中を流れるかの有名なドニエプル河に浮かぶ広大な島の森林公園、ジードロ・パークで開催された。

選手たちが２分間隔で次々にスタートしてゆく。日本のトップ・スタートはファイト満々の木村選手、続いて WTOC 二年目のＰクラス蓮本選手がウクライナの少年にエスコートされて出てゆく。

２回目の WTOC に挑む 蓮本選手

スタートが始まって約一時間が経過、今度は同じくＰクラスの初参加、水野選手。彼は重度の障害に屈せず電動車椅子を日本から持参し参加した。車椅子の持込みをいろんな航空会社から断られて苦労したが、やっと念願のウクライナにやって来た。親切そうな青年に付き添われてスタート。お姉さんが特別許可をもらって医療介助者(Medical Attendant)として二人から少し離れてついて行く。

続くは第３回日本トレイル０選手権を制した大久保選手。そして毎年の世界トレイル０選手権大会で、次第に力を付けつつある「世界の Kiji」こと木島選手。そしてしんがりは田中選手がスタート開始後約二時間たって出てゆく。

■好調なスタートの DAY1・・も

さて、制限時間の 150 分がたって、ゴールする選手が増えて来る。今日は 16 コントロール＋3 T/C の１９点満点であるが、正直言って成績より気になるのはこの“暑さ”。いや、もうすごい。

そして成績が続々と発表されてゆく。パラリンピック・クラスでは蓮本選手が木島選手の上位に立った。初挑戦の水野選手はハンデをものともせず 29 位と健闘した。

パラリンピック・クラス成績

1位	R.Falda (ITA)	17p45s
2位	E.Butrimas(LIT)	17p122s
3位	B.Gustafsson(SWE)	16p112s11
5 位	蓮本 勇喜	12p132s
21 位	木島 英登	11p64s
29 位	水野 義幸	6p184s

オープン・クラスではスウェーデン勢がどうしたことは一向にふるわず、当初のリザルトボードは木村７位、大久保９位と日本選手２人が上位に突入。

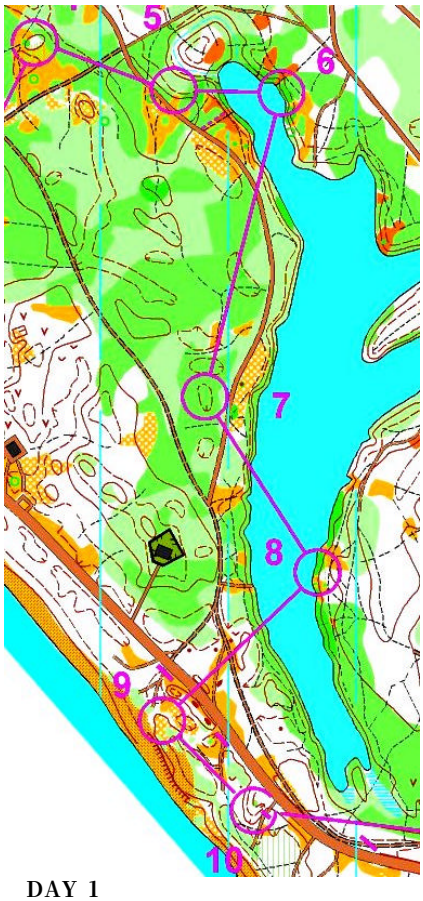
このまま DAY2 につなげるかと思いきや、一か所のコントロール・キャンセルが発生し、時間と集中力を傾けてこのコントロールを正解した木村とＰクラス木島が努力の甲斐なく泣く泣く順位を下げる結果となった。

そして１日目の最終結果は・・・

1 位	J.Turto(フィンランド)	17p33s
2位	R.Falda (イタリア)	17p45s
3位	K.Kereso (スロヴェニア)	17p48s
8位	大久保 裕介	15p41s
17 位	木村 治雄	14p23s
31 位	田中 徹	12p150s

Ｐクラス　フラワー・セレモニー

ちなみに優勝候補の Martin Fredholm と Stig Gerdman(ともにスウェーデン)は、21,22 位とまったく振るわず。「岩」のテレインに慣れた彼らにとっては、フラットで「土」の微地形や植相を主体としたこのようなテレインは案外不向きだったのかもしれない。



DAY 1
広大な島の森林公園、ジードロ・パーク

■ 世界チャンピオン決まる

中一日のモデル・イベント２の後、いよいよオープン・クラスの世界チャンピオンが決まる日 DAY2。

かんかん照りの 39 度近い猛暑が四日目ともなると、さすがに各選手の疲労は隠せない。集中力も落ちている。そのような悪いコンディションをいかに乗りきり、自己コントロールが出来るかどうかが勝敗の分かれ道になるかもしれない。

DAY2 の特徴は、2.7 キロ、16 コントロール＋3T/C、起伏のあるコースのため今日の制限時間は 2 時間 45 分と長い。

DAY1 の成績下位の選手からのチェイシング・スタート。下位のものは挽回を、また上位のものはさらなる高順位を目指す。チャイムの合図にスタート・ラインを踏み出す各選手の表情は緊張感にあふれていて、声をかけるのもはばかられる雰囲気だ。

さて、フィニッシュだが、二番目にスタートした水野選手が無事に制限時間内に姿を現す。みごとに完走（？）。意外に元気な様子でほっとする。続いて蓮本選手もゴール。両選手とも三つの TC をすべて正解とはすばらしい。木島選手は「もう少し取れたはず・・・」と悔しがる。

Ｐクラスにとっては、今日は国別チームの上位二人の成績でトロフィーを争う国別対抗戦である。結果はスウェーデンが圧倒的な総合力を見せて１位、２位はロシアが毎回のように確実に獲得、３位は地元ウクライナが入り主管国の面目をほどこした。常連の英国勢は今年は振るわなかった。

Ｐクラス　チーム・トロフィー

さて、世界チャンピオンの決まるオープン・クラスはチェイシング・スタートのため最後の選手が帰ってくるまでは成績が確定しない。しばらくは渾身の挽回を期した田中選手が 23 点 300 秒の成績でリザルト・ボードのトップを占めていたが、次第に新しい名前のボードが彼を押し下げてゆく。

なんとＤＡＹ１では 21 位だった 2006 年の優勝者、スウェーデン M.Fredholm がトップに躍り出たではないか。驚くべきことである。彼らにはいかなるテレインであってもそれにすばやく頭を切り替えて順応し、そして対応できる、なにか特殊な才能があるように思われる。まさに奇跡の追い上げでトップの座をしばし維持する。

大久保選手が帰ってきた・・・が、総合 30 点 86 秒と本人も不本意な成績のせいか口数が少ない。日本選手最終スタートの木村選手も上位選手の点数が伸び悩むなかで大いに日本チームの期待の的となった。一時、大久保選手は 5 位の位置を占めたが、掲示された成績は二転三転を繰り返しリザルトボードは上がったり下がったり、成績の確定には何度もスリルを味わうことになった。

それでも大久保選手は日本チャンピオンの実力を遺憾なく発揮し６位の入賞を果たした。メダルは逃したものの、大国スウェーデンの３人すべてを破っての入賞は大きな成果である。木村選手にも成績に集計ミスがあり再チェックの結果、堂々の 12 位となった。田中選手はいささか不調で 31 位に終わった。

大会会場では競技に引き続き、入賞者を称えるフラワーセレモニーが行われた。過去 4 回の世界選手権で我が日本は３回のフラワー・セレモニーに列している。

２日目単独の成績ではパラリンピック・クラスのスウェーデン代表 Lennart Wahlgren が難問続きの 19 問のうち、17 問を看破するという偉業を成し遂げた。これは１日目の成績で、やはり障がいを持ちながら堂々の全体２位を勝ち取ったイタリアの Roberta Falda とともにこの競技のバリアフリー性を証明する偉大な結果と言えよう。

オープン・クラス　フラワー・セレモニー

綜合表彰式は大会センターでバンケットに併せて行われた。オープン・クラスの優勝はスロベニアの Kerestes Kreso 選手、２位にはフィンランドの若手 Antti Rusanen、３位はノルウェーのベテラン O.J.Waaler が食い込んだ。

大会役員の紹介と慰労、次回開催国チェコへの大会旗の引継ぎに続き、各国選手、役員が勢揃いしてバンケットでは地元ウクライナのウオッカやワイン、ビールが入り、国境を越えた和気藹々のひと時を過ごすことができた。

1999 年のワールド・カップ時からは格段の進歩が見られたものの、地図精度、コントロール設置、そして運営面ではまだまだ多くの課題を残した世界トレイル O 選手権大会であったことは事実である。しかし、我々日本も、２年前に愛知で経験したとおり、並大抵ではない大会運営を完遂したウクライナのトレイルO関係者の努力に感謝し、心から敬意を表したい。

翌日はテレインへ入っての IOF クリニック。その後、各国選手団は来年の再会を約束し、それぞれの母国へと別れていった。

その来年だが今年と同様フットの世界選手権と同時に 7 月中旬、チェコの Olomouc を開催地として行われる。

多くのトレイルO選手がこれを目指し、最強の日本チームを構成してこれに臨みたい。

最後になりましたがサポートをしていただきました多くの皆さまに、日本選手団一同より心からの感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

（日本選手団チームマネージャー
小山太朗）

トレイル・オリエンテーリング世界選手権２００７ 日本選手団